

## 「子どもという人間」への理解(2)

### —現象学的記述の分析—

児童学部 児童学科 村井 尚子

**要旨：**ユトレヒト学派の現象学研究の流れを継承するオランダの教育学者トン・ベークマンは、天賦の才を備えた学者にのみ可能であった現象学の方法を教育学を学ぶ学生にも可能にするために、「現象学の民主化」という試みを行っていた。本稿では、「現象学の遂行」と名づけられたユトレヒト大学での授業において彼とその共同研究者らが実施していた現象学的な記述の分析の手順について、論文「現象学的記述の分析」を参照しながら考察する。また、その手順に従って筆者のゼミで実施した「暗闇の中での恐怖」に関する状況分析について報告を行う。彼の提起した現象学的記述の方法は、哲学的な厳密性に関しては議論の余地があるものの、教師を目指す学生や教育を研究するものが子どもを理解し行為を方向づけるための重要な方策となるものと考えられる。

**キーワード：**ユトレヒト学派、現象学的記述、状況分析、暗闇、子ども理解

#### はじめに

前稿「子どもという人間の理解(1) —ベークマンの現象学的教育学<sup>1)</sup>」において、教師の専門性を「子どもという人間」への理解と規定し、さらに、「子どもという人間」への現象学的な理解を深めることによって、教師の専門性が高まることを論証する試みを行った。さらに、別稿「実習における教育的契機への反省的記述—反省的な幼稚園教員養成のための一方策<sup>2)</sup>」においては、教育実習において実習生が出会った「判断に迷った場面」を「教育的契機」と名づけ、その状況とその際の実習生の行為、その背景にある判断、幼児との関係性とその変化について記述を行うことで、実習生の判断の背景にある前理解についての現象学的な反省(リフレクション=省察とも呼ばれているが、ここでは現象学的な意味を強調するために「反省」としている)を深めることを目指した。前者の主眼は子どもという人間そのもののあり方を現象学的に理解すること、後者のそれは実習生のもつ子どもや教育に関する前理解への現象学的な反省と言えるが、どちらの場合にも、いかに現象学的な態度で記述を行うかがトピックとして持ち上がってくる。

現象学的方法に関して筆者は、上述の前稿において、ランゲフェルトの後任でありオランダユトレヒト学派の継承者であるトン・ベークマン(A. J. Beekman, 1929-)によって「参与的経験(Teilnehmende

Erfahrung)」と名付けられた独自の方法について、彼が目指した現象学の民主化における意義と方法論的長所の解明を行ったが、現象学的記述の具体的な訓練に関しては課題が残されていた。しかしベークマンは、オランダのユトレヒト大学でのゼミナールに加え、アメリカのミシガン大学に滞在し、子どもの遊び場などについて様々な現象学的記述の実践の授業を行うなどしている<sup>3)</sup>。そこで本稿では、ベークマンがユトレヒト大学において1974年から1986年まで実施していた「現象学の遂行」の授業の過程において現象学的記述の訓練がどのように行われていたかを分析し、その方法論に則って筆者が自身のゼミナールにおいて実施している現象学的な記述の訓練の実践報告を行い、その意義について考察を行う。

#### 1. ユトレヒト学派の現象学的記述とその民主化

##### 1-1. ユトレヒト学派の現象学的記述

1950年頃にヒューマンイズムと人格主義を鍵概念として集まった心理学者、教育学者、精神科医、犯罪学者、法律学者らによって構成されたユトレヒト学派<sup>4)</sup>では、読者を状況に対する深い共感の世界へと引き込む卓越した現象学的な文章がもたされた。ヴァン・マナーネン(van Manen, Max, 1942~)によれば、生活世界の重視と具体的な状況において自明視された特質に関心を払うという点でユトレヒト学派の方法にはエス

ノメソドロロジーや文化人類学における「厚い記述」などとの類似点が見出され得るが、これらと比べてユトレヒト学派ではより哲学的人間学と実存主義的な色彩が色濃くみられる<sup>5</sup>。

ユトレヒト学派においては、旅行、病の床、会話、隠れ場所、ホテルの部屋、車の運転などといった人間が日々の日常生活において出会う様々な出来事が現象学的心理学及び教育学の研究対象とされ、「状況分析 (situation analysis)」と名付けられた方法でその経験の意味の解明が行われてきた<sup>6</sup>。

ユトレヒト学派の「状況」概念は、人間を「状況－内－存在」と捉えるサルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) の影響下にあると考えられる。すなわち状況はすべて、私の状況であり、私は私の存在のしかたにおいて、私自身で私を選ぶのである。私は、偶然のうちに与えられた状況の意味を解釈し、それをのり越え、その意味を変容していく。ある状況がいかん解釈され意味づけされているかを分析することで、我々が未来に向けて自己を投企していくその方向づけがなされるのである<sup>7</sup>。

「状況分析」は、1) 日常の生活経験を素材として集め、2) その経験の構造的な要素を考察し、3) それらを実践的行為に向けて定式化するという3つの要素が巧みに組み合わされた形で行われてきた。こういった現実の、あるいは想像上の様々な生活世界における経験に関して分析的な記述を使用することによって、状況の基本構造が姿を現すことになる<sup>8</sup>。

たとえば、我が国でも翻訳が出版されているヴァン・デン・ベルグ (J. H. van den Berg) の『病床の心理学』では、病の床に就いた人の心理が極めて巧みに描写されている。ここでは冒頭部分に描かれる「ある家庭の父親の報告」について「状況分析」の視点から少し見ていくことにしたい。

#### 1) 日常の生活経験

ここでは短期間に回復するが、明らかに気分がすぐれず、二、三日寝込まなければならないという病気に罹った父親の経験が記述されているが、これは日常的に我々が経験し得ることである。

#### 2) 経験の構造的な要素

- 世界の狭隘化：病気に罹った「私」にとって世界はベッドで身を横たえている場所に限定され、日常生活が行われている階下や、外の路上から自分が除外されていると感じる。
- 時間の限定：将来と過去とは輪郭を失い、限られた現在のなかにものみ限定される。

- 研ぎ澄まされた身体感覚：健康な時には意識しない身体的存在を鋭く自覚する。
- 視点の固定化：身近にある壁紙や絵に執着しそこに意味を見出そうとする。
- 身につけるものからの呼びかけ：今は用をなさなくなった外出用の衣服や靴、帽子といったものからの呼びかけを発見する。

#### 3) 実践的行為についての定式化

本書ではこのあと、慢性病や死に向かう患者の心理についての現象学的な分析が続き、その後見舞客に対する諸々の助言、医師と患者についての助言が書かれている。これは、病床にある患者の心理についての現象学的分析を受けて、それをいかに実践的行為へとつなげるかという提言と捉えることができる<sup>9</sup>。

このように、短期間であるが、しかしその直中にはその人の棲む世界の有り様を完全に変容させてしまうといった、誰もが経験したことのある状況についての記述から始められることで、読者は自身の経験を想起し、自身が共通して持っている感覚を喚起される。そして、病床にある人の置かれている状況へと自らを引き入れられた読者は、その状況における何らかの実践的行為へと呼びかけられることになるのである。

#### 1-2. 現象学の民主化

1965年にユトレヒト大学の教育学部に着任したベークマンは、経験科学的な教育学を擁立する研究者らの批判に抗し、ユトレヒト学派の伝統を守ることに力を注いだ<sup>10</sup>。そして、従来のユトレヒト学派の研究者たちの現象学的な記述が、「才能にあふれ」、「素晴らしい」分析を行うことができるごく一部のエリートによってのみ可能であるものと指摘し、その「民主化」を訴えたとされている<sup>11</sup>。現象学の「民主化」は、エリートではない学者や教育学の初学者である学生にも現象学記述をある程度可能にすることを意図する。もちろん、全ての人がユトレヒト学派の研究者たちと同じようにすぐさま現象学的な状況分析を行えるわけではない。「現象学的方法のもつ解釈学的な厳密さと芸術的な感受性は、統計の手続きなどが誰にでも訓練次第で可能になるのとは違って、ある種『訓練しがたい』能力を必要とする<sup>12</sup>」。

上述の通り筆者は、この現象学の民主化のための試みのうち「参与的経験」について別稿ですでに考察を行っている。「参与的経験」は子どもの風景へと研究者が自ら足を踏みいれ、子どもの生活世界の有り様を

できる限りありのままに経験するという意味で現象学的な態度を身につけることを目指すものであった。これに対して、本稿で扱おうとする「現象学的記述」は、子どもの置かれている状況をいかに現象学的な仕方て記述するかという点に主眼が置かれるのである。

「現象学的記述」を具体的に行うためにベークマンは、1974年にユトレヒト大学の彼のコースに新しい要素「現象学の遂行 (doing phenomenology)」を導入した。学生は自身の生きられた経験として「暗闇において恐れること」「眠りにつくことと目覚めること」といった特定のテーマ、あるいは「初めて学校に行った日」「初めての自転車」「初めて他人の家に泊まったこと」といった初めての経験に関して記述することを求められる<sup>13</sup>。

この授業の内容に関して、ベークマンとその共同研究者であるローレン・バリット (Loren Barritt)、ハンス・ブレーカー (Hans Bleeker)、カレル・ムルデルイ (Karel Mulderij) が、実際に「暗闇における恐怖の分析」を行った事例に基づいて論文「現象学的記述の分析 (Analyzing Phenomenological Description: 以下「分析」と略す)<sup>14</sup>」を共同執筆している。次章では、この論文を主に参照して、現象学を初めて遂行しようとする学生が、状況分析を通じて経験におけるテーマを定式化し、現象学的記述の手懸かりを得ていく方法について考察したい。

## 2. 現象学の遂行の手順

### 2-1. 経験の記述

ベークマンらは、まず学生に自らの「暗闇における恐怖」に関する経験について1頁か2頁の短い記述をすることを求める。道具的方法によって伝達可能ではない現象学的記述を最初から遂行することは困難であるが、さしあたって「可能な限り記述的(主観・感情などを排して)事実に基づいた言語を差し込み、自分が書いているものなかに解釈や因果関係に帰するものを差し込まないように警戒すること。事実性の詳細に没頭してしまわないこと [APD2]」に留意した記述が試みられる。経験を個人によって「生きられた経験」として記述的に(傍点筆者)記述するよう努力することが必要なのである。

学生たちが自らの記述を完了したところで、次のうちの幾つかの記述が選び出され(「暗闇における恐怖」の場合には暗い夜道を通して家に帰るという3つのテキストが提示されている)、学生たちは自らの経験に基づいた記述との比較を行いながら他の人のテ

キストを読む。この時点で、主観的な経験である「暗闇における恐怖」に、共有された質が見出されるという間主観的な(傍点筆者)同意を見ることが多く、そのことによって参加者は興奮するという [APD1]。

「分析」においては2つの記述が暗闇の恐怖を生きられた経験として語る質をもつものとして紹介されている。紙数の都合上、[記述Ⅰ]は省略し、より喚起的な文章であると考えられる [記述Ⅱ]を以下に一部引用する。

#### [記述Ⅱ]

電柱と最後の家が見えなくなるやいなや、自分が暗闇に囲い込まれたと感じる。闇は完全にあなたを包み込みあらゆるところに存在する。何かがあっても姿を現さないということに不安を覚える。たとえばそれは、犬を怖がるのとは異なっている。あなたは犬を知っているし、長い棒で犬から身を守ったり他の道を通ったりすることができる。暗闇は別の意味での敵だ。私は、それがいったいどの方角から来るかを正確には知らないで、一度にすべての側から脅かされていると感じる。急いでこの暗い道を進みながら、私の眼はどんな動きも見逃さない。私は耳に入るすべての音の意味を確かめようとする。なにも変わった物音を聞かなかったら、いくらかほっとする。鳥が突然飛び立っただけだ。風が梢を通り抜けたのだ。音の正体を確かめ、名前を付けることで私は気持ちを落ち着かせることができる。しかし、目を凝らし耳を澄ましていたとしても、背中はいつも無防備だということを感じている。「それ」は後ろから来るかもしれないのに、まだ私は後ろを振り向いていない。自転車のペダルをとびきり激しくこぐことで、私は背中が安全だと思おうとする。私は自転車に乗っているし、それは私を守ってくれる。突然、恐怖でこわばってしまう。まるで足が麻痺したかのように。誰かあそこに立っているのか?

何かの形が不意に私の前にたちはだかる。人間の形だ。近寄ってみて私は安堵のため息をもらす。なんでもない。ただの茂みだった。私は何でもすぐに人の形だと思いこんでしまうようだ [APD3]。

これに対して生きられた経験を記述しているとはいい難いものもある。比較のために以下に記述Ⅲを引用しておく。

[記述Ⅲ]「暗闇」という語は、我々の言語使用においては、ある種の不吉な意味をもっている。「暗い時間」が陰鬱な印象をもっているというように。また、この語の「適切な色合い」は、何かしらそれを脅かすようなものをもつ。多くの文化において、暗いという

語はこの意味をもつ。光がよきものであった創世記の物語の例と、何か悪いものを含意する暗闇とを比べてみればよい。

暗闇の形式と人々が暗闇に対して示す恐れとの量は文化によって異なる……。さらに個人によって異なる。ある人は他の人よりもずっと怖がりだったりする。

暗闇のもつ不快で不吉な性質は誰にでも何らかの影響を与える。闇のなかではよく知っているものも不吉になる。不吉さがあなたを取り巻き、それは場所を特定することができない。日中は気にならない音も夜の静けさのなかでは恐怖を呼びおこす。

暗闇がもたらす脅威、不確かさは、他の人と一緒に暗闇を「渡る」ときよりも、暗闇のなかを一人で歩くとより不快なものとなる。他の人と一緒だという知識と信頼が暗闇の力をあまり怖くないものに変えてくれるのだ [APD3]。

この記述は、出来る限り客観的、分析的な形で暗闇について語ることを目指している。従来のアカデミックな意味では善い記述の例とされるのはこちらの後者であるとも考えられるが、「個人的な経験」を「内側から」書くことを目指す生きられた経験を記す現象学的な記述という観点から見れば不十分だと言える。ベークマンらはこの種の記述によっては「ある人が暗闇に取り囲まれたときに恐怖を感じているその感情、思考、反応について我々は理解することはできない」と考える。そして、「記述を欠いた分析の例」として [記述Ⅲ] を手厳しく批判している [APD4]。

そうではなく、彼らが学生の記述に求めるのは次のようなユトレヒト学派の現象学における基本的な態度なのである。「我々は、可能な限り我々がその経験をしているとき、あなたにとって、我々にとってそれがどのようなものであるか、ということを取り戻すこと、自明だと受け取られていることを意識に上らせることを望んでいる [APD4]」。

## 2-2. テーマ分析

続けて、書かれた記述を分析する段階に入る。この分析の目的はそれぞれによって書かれた記述における共通の「テーマ (theme)」を見つけだすことである。「テーマ」という語は、文芸における主題、音楽における楽曲に表現されるべき理念<sup>15</sup>と捉えられるが、ユトレヒト学派において用いられる際にも概念的には通底するものがあると考えられる。テーマ分析の方法を継承発展させているヴァン＝マーネンによれば「経験の諸構造」、「その経験を成り立たせている構造<sup>16</sup>」

と定義される。

それゆえ、いくつかの記述を分析していくことで浮かび上がってくる共通のテーマを、その経験の「基本構造」と言い換えることもできるのだが、彼らの手順としては個々がそれぞれの記述を読んで「重要な要素」だと考えたものを挙げ、それをグループの中で比較共有していく。その際重視されることは「それぞれの記述を新鮮な目で読むように努めること」であり、そうすることで「重要なモーメント (moment) が言語のフレームワークから飛び出してくる [APD6]」。ここではたくさん選択することについて不安がる必要はない。

「モーメント」という語を明確に概念定義することは筆者の力不足から困難であるが、「瞬間、時点、契機、節目、重要性」等の意味をもつ「モーメント」という語の使用には、「火花の如く飛び上がってくる [APD6]」というような時間性、力動性が意図されていると考えられる。リストアップされたモーメントは以下の通りである。

### 記述Ⅰ

1. 家までの道のりをすべて思い浮かべ・・・どの場所が最も「危険」かを考えていた。気持は別のところにあった。
2. 森。予想していた以上に暗く、おどろおどろしい一番よい入り口を探した。
3. なるべく音をたてないように努めた。
4. 小枝を踏んで一脅威に悩まされた。
5. 身をかがめた。
6. 注意深く後ろと横の方を見つめた。
7. 独り言を言った—それはなんの助けにもならなかった—まるで誰かほかの人が自分に話しかけているかのようだ。
8. 物音がする。息を凝らし、自分を小さい、無意味なものと感じ、心配になった。膝がふるえる。
9. 鳥、ふくろうだ (怖がらなくても大丈夫だ)。
10. もっと早く進もうとする。
10. 目を見開き、耳を澄ました。
12. 手が汗ばんでくる。
13. 茂みを越えてほっとする。
14. 誰かが見えたように感じた—間違いだ (安心)。
15. 長い時間が経ったように思える—終わりがなくように思えるほど長い。
16. お金をもらっても戻りたくない。

### 記述Ⅱ

1. 暗い道・・・私に向かって大きく口を開いている。

2. 不安と頼りない気持ちでその道へと踏み入る。
3. 最後の街灯と家。そして私は自分が暗闇に同化されたように感じる・・・それはあらゆるところに存在する。
4. 正体を現さない・・・何ものかについての心配。
5. 急いで進む。
6. 瞳を凝らし、耳を研ぎ澄ましてどんな音もその正体を確かめようとする。
7. 音の正体を確かめることができると安心する。これは鳥だ。これは風だ。
8. 背中は無防備だ。
9. 後ろからは弱いのに、まだ後ろを見ていない。
10. ペダルを激しくこぐことで・・・後ろを守ろうとする。
11. 私は自転車に乗っていて・・・警戒を怠っていない。
12. 驚いて・・・足が麻痺してしまったようだ・・・誰かがそこに立っている？
13. 近寄ってみて・・・安心した・・・なんでもなかった。
14. 最悪なのは・・・ここで人と出会うこと・・・不信心・・・善意をもつことは不可能だ。
15. 最初の街灯、光、家々、深くため息をつき安心が私をとらえる。
16. 後ろを見ると、一暗闇は遠ざかっていく。
17. もしここで人と出会っても、もう恐れることはしない。

### 記述Ⅲ

1. 暗闇の不吉で不快な性質。
2. それはあなたを取り巻く。
3. 音は・・・恐怖を呼び起こす。
4. 不確かなものが暗闇からやってくる。
5. 一人で歩いているときはさらに不快だ [APD6-7]。

### 2-3. テーマの定式化

モーメントが書き出されたところで共有が行われ、記述者本人からのコメントや補正が行われる。記述者は分析者の洞察を拒否する権利までは持たないことになっており、あくまでコメントをすることによってより正確な定式化へとつなげることが目的である。

こうして、記述者本人によって使用されている言葉を用いることで予備的な選択ができあがり、ここからテーマの定式化へと続いて行く。ベークマンらの方法においては、テーマは、記述に誠実であることに留意しながら定式化されるが、記述された文章それ自体にテーマが含まれるというよりは「行間」を読みとることで定式化がなされていく。この定式化は恣意的なも

のであり、その間主観性をより高めるために、グループ内での比較が行われ、活発な議論がなされる [APD7]。そして、以下のような共有されたテーマのリストが作成される。

1. 暗闇を経験する際には、前もって不安にかられる
2. 暗闇は身体全体を包み込み、取り囲んでしまう
3. 同定できない音によって驚かされる。その正体を明らかにすることで恐怖は退く
4. 物体を見ると信頼できない他の人間の姿を想像する、同定することで恐怖は退く
5. 早く通り過ぎたいという思いに駆られ、急ごうとする
6. 高められた意識、より注意深く耳を澄まし、眼を凝らそうとする（この感覚は聞いたこと見たものに驚くことに矛盾するものであるにもかかわらず）
7. 後ろ側は護られていない
8. 明るいところ、人気のあるところに戻ったとき、心配と不確かさから救われる [APD7]

記述者本人の言葉を用いて選択されたモーメントから、経験の基本構造を表すテーマへの移行に関しては、彼らも言及している通り「恣意的」で、「行間を読む」ことによって可能となり、あくまで直観によるところが大きいようである。しかし、ベークマンらはこの段階において「特別な能力を要求はしない [APD7]」と判断している。この点に関しては、次章で示す筆者自身の追試においてもある程度考察可能であるが、さらなる探究が必要と思われる点である。この「テーマ分析」の手順に関しては、ヴァン＝マーネンもアルバータ大学でのコースにおいて継承発展させており、著書『生きられた経験の探究<sup>17)</sup>』の中で頁を割いているので、別稿にて検討することにしておきたい。

ところでここまでは、グループ内での記述の中で、ある一定の基準（例えばここでは、ほとんどの記述者が暗闇の中で一人でいるときに感じる恐怖について書いているし、記述者は全て西欧世界の住人である）における分析を行うことでテーマが導きだされてきた。これに対して、記述にヴァリエーション（現象学的変奏）を意図的に組み入れていくことで、経験の基本構造がさらに強みをもったものとして同定されると考えられている [APD10]。

ヴァリエーションとして考えられるのは、まずは異なった状況における暗闇の恐怖に関する記述を組み入れることである。例えばアフリカやアジア、ラテンアメリカなどの異なった文化環境における暗闇の恐怖や、

夜に一人で家にいるときのような別の物理環境、さらに他者と一緒に暗闇にいるといった異なる社会的環境について分析してみることも有用だとされる。「分析」において使用されているのは、40人くらいで洞窟探検ツアーに参加したときに灯りが消され、暗闇の恐怖を探検した事例である。ここでは多くの人々が同一の場にいるにもかかわらず、記述者は恐怖を感じていることが分かる。そして、「他の人と一緒に暗闇にいたとしてもやはり孤独で恐怖を感じる」というヴァリエーションが加えられる [APD10-11]。

これらのヴァリエーションをも考慮に入れ、表1の

作成をもっていったんこの作業は完成とされるのである。そして、グループ内での記述の分析という枠組みを離れて、さらに経験の意味を強化するために異なった種類のヴァリエーションを加えることが提案されている。

#### 2-4. 他の情報を分析に加える

詩や小説、日記、民話、絵、録音されたテープ、観察、インタビューなどの素材を用いてここまでの記述を補強する。ただし、この際留意せねばならないのは「いかに面白いか」ではなく、「生きられた経験につい

表1 暗闇の中の恐怖

共有されたテーマ 共通の形式	テーマ的言明	ヴァリエーション
1. 前もっての心配	I-1 家までの道のりをすべて頭に思い浮かべ、どの場所が最も「危険」かを想像した I-2 不安を感じながらそこに身を投じた	
2. 暗闇は包み込む	I-2 森。そこは想定していたよりもさらに暗く、もっとおどろおどろしかった。一番よい道を探した II-1 暗い道は・・・私に向かって口を大きくあけている II-2 私はそこに身を投じた II-3 ...そして、私は自分が暗闇に包み込まれている感覚をもつ。闇はあらゆるところに存在する III-2 それはあなたを取り巻く	自分を小さくするように努める—身をかがめる (I-5)
3. 正体のわからない音に驚かされる。正体がわかると恐怖は遠のく—安心	I-4 小枝を踏んで・・・恐れおののく I-8 音がする。息がつまり、自分が小さく、意味のない、不安な感じ。膝が震える I-9 鳥だった、フクロウだ (恐れることはない) II-6 耳に入る全ての音の意味を確かめようとする II-7 音の正体を確かめることで落ち着く。あれは鳥だ、風の音だ III-3 音は・・・恐怖を呼び起こす	
4. ものを見ると信頼できない他の人間を想像する。正体をつきとめると、恐れは遠のく	I-14 誰かがいるように思えた。見間違いだった (安心) II-12 驚いて足が麻痺する。誰かそこに立っているのでは? II-13 近づいて・・・安心した・・・何もなかった II-14 最悪の事態は、ここで誰かに出くわすことだ・・・不信心・・・善意をもつのは無理だ	
5. 早く行こうとする。急ぐ	I-10 早く行こうと気持ちが焦る II-5 急いで進んだ II-10 必死でペダルをこぐ	長い時間を要する  (とても長い時間がかかったように思える・・・終わりがないようにさえる I-15)

てどのくらい適切な事実に即した姿を与えてくれるか」ということである。

ベークマンらのグループでは『トム・ソーヤーの冒険』の中で、トムと一緒に墓場に行くためにハックルベリ・フィンを待っている以下の場面が最適だとされている [APD11-12]。

・・・横になったまま、じっとしていました。そして、じっと暗やみの中を見つめていました。なにかもが、気味の悪いほど静まり返っていました。やがてそのうちに、その静けさの中から、やっと聞こえるか聞こえないくらいの物音がして、それがだんだんと大きくなってきました。時計のチクタクいう音が自然と耳に入ってくるようになりました。この家の古いあちこちの梁が、ひび割れをおこすような音を、なぜだか分かりませんが、たてはじめました。階段が、ギシ、ギシと、かすかにききました。幽霊がさ迷い出てきたにちがいありません。規則正しい、覆い包んだようなイビキが、ポリーおばさんの部屋から聞こえてきました<sup>18</sup>。

この場面でトムはベッドに横になってハックルベリが呼びに来るのを待っているのだが、暗闇の中でこれから墓場へ行こうという状況において、とりわけ聴覚が研ぎ澄まされていることが了解できる描写である。この経験においては、とりわけ音が意志をもつということが強調され、そこから「幽霊」の存在という結論へとつながる。暗闇の中で聞こえる音に何か分からないものの意志をあてはめるという経験は、多くの人に共通するものだと考えられるが、ここでベークマンらは幽霊が暗闇の中で生きているという想像を「子どもの想像に過ぎず、大人は人の形を見る [APD12]」と断定する。

この見解に関して筆者はすぐに同調することはできない部分があるが、もっとも、ここで述べておかねばならないのは大人と子どもとの対比の問題である。大学の授業の中で行われる経験の記述は、それが子ども時代の経験を想起するものであったとしても、やはり大人によるものであることは否めない。我々が知りたいと欲するのは子どもの経験であるが、実際には子どもにインフォーマントとして経験を語ってもらったり記述してもらったりすることは難しいし、現象学的に意義のある記述が得られるという保証はない。であれば、大人が記述した経験を補強するものとして、やはり子どもの経験を描いた文学作品や絵本、など上記の素材を用いていくことが重要となってくると考えられよう。上に引用したトム・ソーヤーの経験の描写は小

説素材としてはたしかに最適であると言えるだろう。この小説は著者マーク・トゥェイン (Mark Twain, 1835-1910) 自身や彼の周囲にいた人々の子ども時代の実験の経験を描いたと言われており<sup>19</sup>、その意味では子ども時代の経験を想起した事例として用いることに意義がある。さらに後述するように、筆者はルソーの『エミール<sup>20</sup>』や絵本『モチモチの木<sup>21</sup>』なども素材として用いている。

## 2-6. 現象学的記述へ

前節のような手続きを経てさらに補強されたテーマは、人間の主観的経験における共有された質を表すものとなる。卓越した資質をもつ現象学者でなくとも、グループワークによって各自の経験を共有し、話し合いを重ねることで、暗闇の経験の基本構造を現象学的に導き出すことが出来ていると考えられ、これはまさに「現象学の民主化」と言い得るだろう。

ここまでの予備的分析を経て暗闇における恐怖についての現象学的な記述によるレポートを書くところまでで完成となる。

レポートを書く際に留意すべきなのは、「意味が強く、明瞭に表れる」ようにするために科学的な研究における書き方の規定、禁止事項を「自由に無視する [APD15]」ことである。これは方法論におけるアナキストを自ら称する<sup>22</sup> ベークマンらしい言葉の用い方であると言える。さらにここで必要とされるのは「客観性へのばかげた注意」ではなく、「読者にとって (分析された経験の意味が：筆者註) 理解できるように」「明瞭に書こう」という努力によって「言語に注意を払って、厳密に用いる」ことである。そのためには他の学術的な論文において使用が禁止されている「わたし」という代名詞を使うことを躊躇する必要はないとされる [APD15]。なぜなら、現象学的記述においては、客観的な事実の説明よりも、主観的な経験の方が重視されるからである。

## 3. 筆者の授業における状況分析の試み

2007年11月、3回生のゼミ生10名を対象に、「現象学的記述の分析」を参考にしつつ以下のようなかたちで「暗闇の中の恐怖」についての状況分析を試みた。

### 3-1. 暗闇に関する文献、絵本の読み合わせ

子どもは暗闇をどのように経験しているか。まず、「暗闇」についての想起の端緒とするために、『エミール』の中にあるルソーの子ども時代の暗闇の経験の部

分の読み合わせを行なった。ルソーは自身が親戚の家で経験した肝試しの折の記憶を語っており、そこには暗闇の中一人で教会まで行くことの恐怖が描かれている。さらに、学生同士で子どもと暗闇の関係を描いた絵本『モチモチの木』の読み聞かせを行なった。10名のゼミ生のほとんどが『モチモチの木』の名前は知っていても実際に読んだことがないという状態であった。山の上の家で猟師の祖父と二人で暮らしている臆病な豆太が、突然病気になった祖父を救うために勇気を出して暗闇の中、山を下りて医者連れに行く物語である。ここまでの手続きにおいて、暗闇の経験に対する学生達の意識を喚起した。この手続きは「分析」においては行われておらず、その適切性に関しては確証がない。

### 3-2. 自らの経験の想起と記述

論文「分析」における現象学的な記述のための提案1に即して記述を行なう。その際2-1において示した記述のための留意点を以下のようにパラフレイズして学生に示した。

1. 単独の経験について書くこと
2. 因果関係によって説明することを避ける
3. 事実性にこだわり過ぎない

20分程度の時間を用い、それぞれが自分の経験を想起しながら記述を行なった。

### 3-3. グループ討議によるテーマの抽出

記述には授業者の指示通りほぼ20分程度の時間を要した。その後、全員がそれぞれの記述内容を読み上げる。参加者は、自らの記述した経験と他の発表者のそれとを比較し、ときに共感しながら発表に聞き入っている。教師が、発表の中からモーメントであると考えた部分を黒板に書く。

多くの学生は自身が暗闇の中で恐怖をいだいた際の身体的な感覚を十分に想起している。この意味で、生きられた経験のモーメントを抽出することができたとと言えるだろう。次に、全員の発表を終えた後、2人ずつの5グループに分かれ、板書されたモーメントを分類する作業を行なった。それぞれのグループの発表が行われるごとに、他グループから共感の声、新たな視点への賛同の声が上がった。そして、それぞれのグループから出されたカテゴリーはさらに話し合いを経て、以下の6つのカテゴリーへと集約された。

①音に関する感覚が研ぎ澄まされる

- ②人や物が異質なものと感じる
- ③以前の経験の記憶が蘇る
- ④行動を制御する
- ⑤錯覚が起こる
- ⑥逃れることで安心する

### 3-4. 先行研究との比較

その後、先行研究において提示されている8つのテーマについて書かれたプリントを配り、全員で読み合わせを行なった。

学生達は、先行研究における8つのテーマに接して、暗闇の恐怖が時代や国、言語を超えて共通のものとして経験されることに驚いた。ここで、学生は「間主観性」という語の意味を体感したといえる。また、板書されたモーメントを学生がグループワークによって分類したカテゴリーが、「分析」において示されているテーマと非常に近似していることも方法論的に非常に興味深いと言える。

その後、さらに先行研究における暗闇の記述の事例を読み合わせしたことにより、学生達の暗闇の経験に対する理解が深められたものと思われる。この度の試みはゼミナールの時間を一時間用いて行ったものに過ぎず、計画も行き届いていたというにはほど遠く、今後授業において時間をかけてこの試みを実施していく予定をしている。

### おわりに

前稿において、ベークマンらのグループの教育学研究は「援助に満ちた洞察」を得るために行われると述べた。「分析」でも、自分達の試みに関して次のような意味づけが為されている。「例えば、校長がスケジュールの変更や新しい規則、新しいカリキュラムを導入しようとしているとき、もし教師や生徒、親たちの現在の状況における経験の意味を探究しようとしたなら、その判断はより善いものとなりうるだろう[APD15]」。

「父親や母親がリビングルームにくつろいで、『お父さん、こわいよ。暗いよ』という子どもの泣き声に『怖いものなんて何もないから早く寝なさい』と応えているのを聞いたことがないか。時々、両親は一緒に部屋まで行き、電気をつけて怖がるものなど何もないことを子どもに言い聞かせることもある。これは何ら解決にはならない。このことは問題への返答にはなっていない。恐怖の対象は、真っ暗な、周りを取り囲んでいる暗闇なのであるから。それは、明かりのもとに



は存在しない。明かりを付けても、誰一人何一つ見ることは出来ない [APD15]。

暗闇における恐怖を現象学的に探究してみることで、上述したような状況において、我々が大人としていかに行為すべきか、行為の方向性を決定づける要因となり得る。すなわち、子どもがある状況をどのように経験するかを現象学的な仕方では理解することで、我々が教育的な判断を迫られるなんらかの状況において、より子どもにとって善いと思われる方向へ向けて行為することが可能になると考えられるのである。このように、ベークマンらの研究はあくまでも実践的な立ち位置を離れない。

しかしこのベークマンらの方法は、オランダの科学雑誌において主観性と結果の一般性（普遍性）の欠如という点で強烈に批判された。当時のオランダの学術環境においては、質的研究の方法を研究方法として同様の価値があるものとして認識することは受け入れられなかったし、綿密さの欠如という面で哲学的基礎はとりわけ批判された<sup>23</sup>。

竹田は、著書『現象学は〈思考の原理〉である』の冒頭箇所においてヴァン・デン・ベルクの記事を引用し、その現象学的な立場は「反客観主義、反科学主義という以上の明確な射程をも」たないもので、彼の現象学は「あんまり噛み砕きすぎ」な説明<sup>24</sup>にすぎないと厳しく批判している。この点に関して、上述のオランダでの批判と論点として重なるところがあると思われる。ここでは哲学的な議論は差し控え、ベークマンの主張する「社会的なアクションを主題とする科学<sup>25</sup>」としての教育学研究において、なかならず教師教育の実践において、彼らが行っている「状況分析」をはじめとした「現象学の民主化」の意義を強調しておきたい。

実際、オランダ語で出版された現象学的研究の遂行のためのガイドとして「教育における現象学的研究のためのワークブック<sup>26</sup>」は多くの学生やその他の人たちが生きられた経験を分析する道筋の最初の段階として役立てられ、その後長い間、この本は教育学における質的方法への導入として用いられていたという<sup>27</sup>。

さらに、グループワークを中心とした授業を70年代から行っていたという点も着目される。現在初等中等教育においても、さらに大学においても着目され、新しい授業形態として研究実践が行われるようになってきていることを考えると、ベークマンらの試みの先進性が明らかとなるのではないだろうか。

現在ユトレヒト大学では、コルトハーヘン (Fred

A. J. Korthagen) らのグループを中心としてリアリスティック教師教育学の手法が開発され、経験へのリフレクションを中心に据えた教師（ここには教育実習生や現職教員の他、保育者、ケアワーカーなども含まれる）の専門性向上のためのワークショップ方式の研修がオランダのみならずヨーロッパ各地、アメリカにおいても盛んにおこなわれるようになってきている。わが国でも武田によって訳書『教師教育学 (*The Pedagogy of Realistic Teacher Education*)<sup>28</sup>』が出版され、教師教育学の考え方を日本に広めていこうとする動きが出てきている<sup>29</sup>。この方法論の根底に教育学の起点として教育の実践が生起している場を重視するランゲフェルトをはじめとするユトレヒト学派の現象学の気風が底流にあることは間違いないであろう。

- 
- 1 村井尚子「『子どもという人間』への理解 (1) — トン・ベークマンの現象学的教育学」『大阪樟蔭女子大学学術研究会人間科学研究紀要』第7号、2008年、163-178頁。
  - 2 村井尚子「実習における教育的契機への反省的記述—反省的な幼稚園教員養成のための一方策—」『日本教師教育学会年報』第17号、2008年、138-147頁。
  - 3 A. J. Beekman, *Welt der kinder, nur eine Spielwelt?* In: H. Danner/W. Lippitz (Hrsg.): *Beschreiben- Verstehen- Handeln*, 1984a.
  - 4 ユトレヒト学派については、村井尚子「ユトレヒト学派の現象学—現象学的心理学から現象学的教育学へ」山崎高哉編著『応答する教育哲学』ナカニシヤ出版、2003年、432頁～449頁を参照されたい。
  - 5 van Manen, M., "An Experiment in Educational Theorising: The Utrecht School": In *Interchange*, Vol. 10, No. 1, 1979, pp. 52-53.
  - 6 Cf. *ibid.*
  - 7 サルトル著、松浪信三郎訳『存在と無Ⅲ』ちくま学芸文庫、2008年およびL. スパーリング著、丸山敦子訳『メルローポンティの哲学と現代社会 (上)』御茶の水書房、1981年参照。
  - 8 van Manen, pp. 52-53.
  - 9 ヴァン・デン・ベルク著、早坂泰次郎・上野轟訳『病床の心理学』現代社、1975年。
  - 10 村井尚子、2008年、166～167頁。
  - 11 William F. Pinar, *The History of Phenomeno-*

- logy and Post-Structuralism in Curriculum Studies: in William F. Pinar, William M. Reynolds (ed.) *Understanding curriculum as phenomenological and deconstructed text*, 1991, p. 240.
- 12 van Manen, 1979, p. 59.
- 13 Hans Bleeker, Bas Levering, and Karel Mulderij, Introduction: on The Beginning of Qualitative Research in Pedagogy in the Netherlands, in: *Phenomenology and Pedagogy*, Vol. 4(3), 1986, pp. 3-13.
- 14 Loren Baritt, Ton Beekman, Hans Bleeker and Karel Mulderij, "Analyzing Phenomenological Descriptions": in *Phenomenology and Pedagogy* vol 2(1), 1984b, pp. 1-17. (以下 APD と略し、引用箇所は文中に記す)
- 15 『哲学辞典』平凡社、1971年、980-981頁。
- 16 van Manen, Max, *Researching Lived Experience*, SUNY, 1991, p. 79. (日本語訳、村井尚子訳『生きられた経験の探究—人間科学がひらく感受性豊かな教育の世界』ゆみる出版、2011年、130頁。)
- 17 Ibid.
- 18 マーク・トウェイン著、大久保博訳『トム・ソーヤーの冒険』角川文庫、2005年、136頁。
- 19 マーク＝トウェーン著、飯島淳秀訳『トム＝ソーヤーの冒険』講談社青い鳥文庫、1989年、277-278頁(訳者あとがき)。
- 20 ルソー著、今野一雄訳『エミール(上)』岩波文庫、1962年、224-226頁。ルソー自身の子どもの時代の経験を書いたものと考えられるランベルシエ氏の家での肝試しの話の部分を用いた。
- 21 齊藤隆介作、滝平二郎絵『モチモチの木』岩崎書店、1971年。
- 22 ベークマンはユトレヒト学派を批判しつつ継承している自身の立場を次のように位置付けている。「我々は実証主義的であるのみならず、アナーキスト的であり、かつ懐疑的である。・・・方法論的には、我々は・・・ドグマ的な誘惑には負けない。他にいろいろな方法論があり、そして折に触れてそれらにはそらなりの根拠もあるのである」。(A. J. Beekman, 1984a, S.79.) さらに、ブレーカーらは以下のように述べる。「ベークマンはその精神においてアナキストである。そしてベークマンが真に心酔している哲学者の名前を一人挙げるならば、それはポール・ファイアアーベンドだろう」。(Hans Bleeker, Bas Levering, and Karel Mulderij, p. 5.)
- 23 Hans Bleeker, Bas Levering, and Karel Mulderij, pp. 6-7.
- 24 竹田青嗣『現象学は〈思考の原理〉である』ちくま新書、2004年、9-11頁。
- 25 Hans Bleeker, Bas Levering, and Karel Mulderij, p. 4.
- 26 (Ton Beekman, K. J. Mulderij, *Beleving en ervaring, werkboek fenomenologie voor de social wetenschappen*. Meppel: Boom 『社会科学のための現象学の知覚と経験のワークブック』。)未入手。
- 27 Ibid. p. 7,
- 28 武田信子監訳、今泉友里・鈴木悠太・山辺恵理子訳『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社、2010年。
- 29 筆者は2011年8月、武田信子氏を研究代表者とする科学研究費補助金によって実施されたオランダユトレヒトにおけるコルトハーヘン氏のリアリスティック教師教育の研修に参加させていただき、多くの示唆を得た。深く感謝したい。

## **Understanding Children Becoming Human Beings (2) : Analyzing Phenomenological Description**

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences

Naoko MURAI

### *Abstract*

Ton Beekman, one of the successors of the Utrecht School, tried to democratize phenomenology by means of having class named “doing phenomenology” in Utrecht University from 1974 to 1986 in order to understand the life world of children. This article is an attempt to explicate the significance of his procedure. To do so the article “Analyzing Phenomenological Description” is analyzed. In this article basic structure of the experience of afraid in the dark is made an appearance through the student’s group work. And the result of the experiment I conducted in my seminar draw on this article is introduced. It is showed that his procedure to do phenomenology by students is useful to understand children’s experience.

Keywords: Utrecht School, phenomenological description, situation analysis, darkness, understanding children